

OCHADAI GAZETTE

お茶の水女子大学学报 第229号 2011年7月6日

OCHADAI GAZETTE Summer, 2011



今生きる者の使命 —「共にある」こと

CONTENTS

TOPICS

- | | |
|-----------------------------|--|
| 平成23年度入学式 1-2 | キャンパス点描 9-10 |
| ● 学長告辞 | ● 卒業生の溝口紀子さん、「猿橋賞」を受賞 |
| 学生のアクティビティ 3-4 | ● 本学独自奨学金「お茶の水女子大学予約型奨学金（みがかずば奨学金）」授与式 |
| 教員紹介 5 | ● 本学独自奨学金「お茶の水女子大学学部生成績優秀者奨学金」授与式 |
| ● 斎藤 悦子 先生 (大学院人間文化創成科学研究科) | ● 新学生寮「お茶大SCC」開寮式 |
| 卒業生紹介 6 | ● 「お茶大グッズ」新アイテムの販売 |
| ● 森 哲子 氏 (理学部化学科卒) | |
| 附属学校園からのお知らせ 7-8 | |



お茶の水女子大学
Ochanomizu University

平成23年度入学式

学長告辞



東日本大震災で犠牲になられた多くの方々のご冥福をお祈りし、被災された皆様に謹んでお見舞い申し上げます。

これまで経験したことのない大きな被害をもたらした地震と、原子力施設の復旧の見通しも未だ立たない中で、入学の時を迎えました。今日入学式に出席している新入生の中にも被災された方がいらっしゃいます。本当によくお出でくださいました。

そして新入生の皆様、ご家族や関係する皆様にご入学をお慶び申し上げます。

地震の当日、帰宅困難になった学生、教職員がこの講堂に集まり夜を明かしました。小、中、高校生に加えて避難場所を求めて来られた方々を含め、500名近い人々がこのキャンパスに留まることになりましたが、その時の教職員一人ひとりの誠実な振る舞いに、私は改めてこの大学の心の豊かさを実感しました。

多くの人が夜を明かしたこの講堂は「徽音堂」と名づけられています。「徽」は「よい、美しい」などの意味があり、「徽音」とは、「よい評判、よい音楽、よい言葉」を意味するといわれています。幼稚園から大学院まで、重要な行事に使われるこの講堂は、まさに本学の教育理念を象徴する空間といえます。ここに大勢の人が集まり、整然と、思いやりの心をもって過ごせたことは私には貴重な経験となりました。

そしてこの日以来、このキャンパスに集う人々の安全をどう確保できるかを改めて考え、同時に、お茶の水女子大学として社会に対して何ができるかを考えつづけてまいりました。正しい答えが得られているわけではありませんが、人々の安全を最優先しながら、可能な限りこの大学に課せられている使命を遂行することが大切だと思っております。また、短期的には勿論、中長期的にも自

らになすべきことを判断し、行動することが重要だとも思います。

地震直後には、大学に備蓄していた物の一部を被災地におくり、その後、被災した学生を支援する取り組みを開始し、また、節電のための対策を講じながら、特に夏の計画停電に備えて授業日程を組み直しました。さらに、放射線に対しては、本学のラジオアイソトープ実験センターで常時測定を行い、その報告を受けております。

当面の事態に対してこれらの対応をしながら、長期的な支援を続け、本学の務めを果たして行きたいと考えています。それは、高度な研究に裏付けられた教育を教授し、社会を発展へと導く女性リーダーの育成です。

136年の歴史を通して、本学は多様な分野で活躍する女性を社会に送り出してきました。設立当時は教育界のリーダーを育成し、日本の教育水準を高めることに貢献してきました。今では、卒業生が活躍する分野は教育関係ばかりでなく、きわめて多岐に渡っていることも、本学の特徴といえます。そしてこの多様性は、本学の教育システムの特徴とも関連していますが、それを可能にしているのが学部間の壁の低さです。本学の教員は一つの大学院研究科に属していて、日常的に意見を交わし、交流を深めています。教員組織のこのようなあり方によって、学生もまた専門を深く学びながら、同時に、隣接する分野や他の領域の知識を広く抵抗なく学ぶことができているようです。

この特徴を活かして、今年度からは新たに「複数プログラム選択履修制度」を開始します。学生の主体性を重んじて、それぞれの関心に沿って専門性を深め、あるいは領域を横断して広く学ぶことができる履修制度です。これは、3年前から開始した「21世紀型リベラルアーツ教育」とともに、本学独自の教育プログラムです。

今年度入学した皆様は、学生の主体性を重視したこのカリキュラムを履修する最初の学年に当たります。「主体的であること」は、自らが判断し決断することを必要とします。それは簡単なことではありませんし、それには正解もありません。失敗とってしまうこともあるかもしれません。ですが、大学は失敗することを学ぶ場でもあります。しかも、身近に優れた先輩や教師がいます。学生と教員の距離が近いこともこの大学の特色ですので、この環境を十分に活かしてください。この大学が少人数であることの、そして少数精鋭の大学であることの、強みはここにもあります。学生時代の苦労や工夫はきっと将来飛躍する力となることでしょう。

このように多様性と主体性を重視することはお茶の水女子大学の特色ですが、さらに、「共にあること」「共に成長すること」を今特に大切にしたいと考えています。

今年度新たに学生寮を開設しましたが、この学生寮を、お茶大 SCC (Students Community Commons) と名づけました。その理念は、「共に住まい、共に学び、共に成長する」というものです。平成19年に本学の附属図書館に Learning Commons という空間を作りましたが、そこでは「共に学び、共に成長する」ことを理念としました。そして今回は、さらに「共に住むこと」をコンセプトに加えました。いずれの場合にも、「共にあること」「共に成長すること」がキーワードです。

また、今日皆様のお手元にお配りする資料を入れたトートバッグは、お茶大のオリジナルですが、この購入代金の一部は途上国



の女子教育支援に役立てられることになっています。つまり、このバッグは、これによって支援を受ける人々と「共にあること」の証ともいえます。

どのような状況にあっても、私たちは「共に生き、共に成長すること」が大切ですが、特に現在のような事態の中で「共に生きること」を心に留めてゆきたいと考えています。それは、社会の中で生きる人を育てる大学の、そして特にリーダーとなる人を育てることを使命とする本学の基本姿勢でもあるからです。

思い起こせば、お茶の水女子大学がこの地をキャンパスとすることになったのは、現在の御茶ノ水にあった校舎が関東大震災で焼失したからでした。そして震災の9年後、女性の高等教育の拠点として新たにこの大塚に大学本館とこの講堂が竣工しました。いわばこの講堂は女性の高等教育の象徴であると同時に、震災からの復興の象徴でもあったともいえます。いまこの時、この大学で優れた女性を育成し、そしてお茶の水女子大学として日本の復興の一端を担ってまいりたいと思います。

皆様と一緒に、お茶の水女子大学が、そして一人ひとりが、なすべきことをなし、四年後の卒業の時には日本の復興の兆しを確かに見出すことができますように共に努力をして参りましょう。一日一日、私たちが出来ることを精いっぱい実行することが、今生きている私たちの使命であるように思います。

例年ですと来賓にもお出でいただいて華やかに行う入学式を、簡素にしてではありますが、安全対策を講じて実施致しました。それは、新入生をできる限り予定通りにきちんと受け入れ、一日を、そして一時を大切にしながら勉学に励んでいただきたいと考えてのことです。

今日から皆様がこの大学で充実した日々を送られますように、私たち教職員一同精一杯の努力をして参ります。皆様と共に、輝かしい未来を築くために今日ここから新たな一歩を歩み始めましょう。

改めて皆様のご入学を心からお祝い申し上げます。

お茶の水女子大学長
羽入 佐和子



平成23年度入学式
学長告辞

学生のアクティビティ

2011年3月11日、東日本大震災が発生しました。お茶の水女子大学内でも、生協に募金箱が置かれたり、原子力や原発に関する講演会が開かれたりするなど、震災支援や理解に対する活発な動きが見られます。そこで今回は、「がん茶」と「お茶の水女子大学学生自治会」という、学生が主体となって被災地のために動いている二つの団体を紹介します。

「お茶大生だからできること」 — がん茶

「がんばれ、東日本!がんばれ、お茶大!」

通称「がん茶」の活動理念は、「お茶大生だからできること」を行っていくことです。

「がん茶」発足のきっかけは、代表の末森咲さん(文教育学部言語文化学科3年生)による、募金活動の企画でした。同じく末森さんが代表を務める学生企画プロジェクトD-cha(大学公認の学生組織として、大学の支援を受けています)の活動の一環として、募金活動を企画したことでした。そこで、企画を重ねていくうちに、「募金などのどこでも出来ることだけではなく、大学という、学生や研究者の集ま

る場を活かして何かできないか?」と考えるようになりました。そうして設立されたのが、「お茶大生だからできること」を考え、行動する「がん茶」です。お茶大内の各学科のメー

リングリストで賛同者を募集し、集まったメンバーは37人。学部も学科も違う、学部2・3・4年生からなる団体になっています。



最上先生にインタビュー

がん茶の最大の特徴は、メンバーの持つつながりの多様性です。そして、そのつながりを最大限に活用したイベントが提案・企画されています。例えば、D-chaが助言を受けているリーダーシップ養成教育研究センターの紹介によりハンドマッサージの講習が行われ、避難所等での活動が予定されています。さらには、原子力に関する講演を企画・開催された最上善広先生(理学部長)にお話を伺うなど、がん茶ならではのアプローチ方法や、学問分野との連携などについての摺りあわせを進めています。



がん茶の会議風景

がん茶 連絡先

がん茶の情報はこちらで発信しています!メンバーもまだまだ募集中。

メール : gancha.2011@gmail.com

Twitter : http://twitter.com/#!/Dcha_11

facebook : <http://www.facebook.com/pages/D-cha/208775969141744>

「今すぐに活動出来るのは私たちだけ」 — 学生自治会

お茶の水女子大学学生自治会は、高校で言えば生徒会にあたる、学生の自治組織団体です。お茶大生が充実したより良い学生生活を送ることができるように、考え実行していくことを目的として活動しています。今回は、お茶大自治会の前代表、千種杏奈さん（文教育学部芸術・行動表現学科3年生）に、4月6日および4月13日から4月20日にかけて行われた募金活動についてお話を伺いました。



4月6日に行われた募金活動の様子

何人の方が参加されたのですか？

—自治会執行部6人と有志16人の、計22人が交代で活動していました。

震災は3月11日ですが、4月6日にはすでに募金活動を始めていますね。震災後すぐに活動を始めようと思いはなったのですか？

—私は今回の震災を受けて、今すぐに大学で活動できる団体は自治会しかないと思い、行動を起こしました。私たちは東京にいただけで、東北の被害を直接目の当たりにしたわけではありません。しかし、テレビの報道を見て、相当苦しい思いをされている状況でありながら東北の方々が頑張っているのに、私たちがなにもしないわけにはいかないと思いました。

ボランティアに行きたいと思っても何の知識もないので、私たちに今できることは、歯がゆいながらも募金活動しかないと思い、活動を行いました。

募金活動をしてどのような感想をお持ちになりましたか？

—自治会以外にも有志が手伝ってくださり、募金をしてくださった方も沢山いらっやって活動は成功し、お茶大からたくさんの方々の気持ちを集められました。

この募金が、被災者の方々が笑顔になれるように、少しでも助けになれば、と思っています。

これをきっかけとして、お茶大生が募金以外にもいろいろな支援活動を行おうと考えてくださったなら幸いです。自治会では、D-chaと協力してさらなる支援活動を行っていきたく考えていますので、是非皆さんのご参加をお願いいたします。

被災者の方に、お伝えしたいことがありましたらお願いします。

—大変なことが、私たちには想像もできないほどたくさんあるかと存じますが、ここ東京にも、少しでも皆様の助けになりたいと願う人が大勢います。そのことを思い出していただけたら、という思いでいっぱいです。

教員紹介

ご自身の研究や教育観を語っていただく「教員紹介」。
今回は大学院人間文化創成科学研究科准教授の齋藤悦子先生にお話を伺います。



Saito Etsuko
齋藤悦子

企業文化を受け入れても、 どこかでそれを批判的に見ていくことが大切 主体的に生活をつくっていくべき

齋藤先生は2010年10月に本学に着任されました。学部では生活科学部人間生活学科生活社会科学講座、大学院ではジェンダー社会科学専攻にご所属で、専門は生活経済論、生活経営論です。

経営学を学ぶきっかけ

実家が会社を営んだ関係で、大学に進学する際に語学や文学を勉強するよりも社会の仕組みを学びたいと思い、経営学部に進学しました。家庭規模別のマーケティングをテーマに卒論を書きました。卒業時はちょうどバブルの頃でした。今の学生さんに話しても信じられないでしょうが、とにかく求人がたくさんあり過ぎて、へそ曲がりの性格からか大学院に進学しました。

大学院では企業文化の研究をしました。ちょうどバブルの頃、「Japan as No.1」という本に代表されるように、成長し続ける日本企業が注目されていました。成功を収める企業にはどのような文化的背景があるのか興味を持ちました。それぞれの企業には独特の色があり、従業員による文化というものが存在します。なかには宗教じみた文化を持つ企業も存在します。学生時代の友人も入社した企業の色に染まっていきました。

誰も入社してその企業の文化に染まっていきます。過剰にその文化に適応していく人もいます。最初は企業にとって使いやすい社員です。しかし、長い目でみると、例えば地位が昇進していくと、創造していく力がない、様々な視点からものを見ることができないなど、企業の力にはならない場合もあります。

企業文化を一切否定して生きていくという方法もありますが、それでは社内で居づらくなります。企業文化を受け入れても、どこかでそれを批判的に見ていくことが大切です。おかしいと思う文化は、地位が上がって、その文化を変えていく、変えていかなければなりません。

企業文化とジェンダー

企業文化をジェンダーの視点で見ると色々な面が見えてきます。例えば、夫婦関係です。独身時代には分からなかったことが見えてきます。例えば、夫が大企業の社員で女子社員はお茶くみとコピー、男性は猛烈に働かないとマッチョではないという企業に勤めていたとします。そうした企業文化の中で働いている男性は、家庭でも家事育児は全て妻に任せてしまう傾向があります。夫がジェンダー平等な企業で働いている場合は、そうした傾向は少ないです。

ディーセント・ワーク論

私は主体的に生活を作っていくべきだと考えています。そのことを考えていく上で、ディーセント・ワークという考え方があります。日本語に翻訳しにくいのですが、「働きがいのある人間らしい仕事」という意味でILO（国際労働機関）が提唱しています。ディーセント・ワークの内容は国によって違いますが、最低賃金、長時間労働、非正規労働などの労働条件が含まれ、人間らしい生活を守っていくことが企業の社会的責任なのです。日本の企業は環境問題については取り組んでいますが、ディーセント・ワークとは環境問題だけでなく、人権、労働条件なのです。企業の社会的責任やディーセント・ワークにジェンダー視点を入れていくことが必要です。男性と女性との間の賃金格差、非正規労働の割合、勤務時間の長さなどです。例えば、生活時間をみると、男性の場合は結婚しても、独身時代と生活時間はあまり変わりません。しかし、女性の場合は変わります。特に共稼ぎ夫婦の場合は、男性の家事労働時間は変わりませんが、女性の場合は家事労働時間が増えることが明らかになっています。こうした問題を生活経済論、生活経営論の立場から研究しています。また、今日の原発問題も企業の社会的責任やディーセント・ワークに関する重大な課題を提起しています。

お茶大生の印象

お茶大に着任してまだ一年も経っていませんので、よく分らないところがあります。しかし、個性豊かな学生が多く、チャレンジ精神が強いと感じます。ゼミ（生活経済学演習）では、ゼミ生が自分の経験を積極的に発言し議論が活発で、大変刺激的で勉強になります。

聞き手:宮内貴久
(大学院人間文化創成
科学研究科文化科学
系准教授)



卒業生紹介

幸運の女神は準備のできた者に微笑みかける — パスツール

初の女性社員として、 研究留学を果たす

三菱化成（現：田辺三菱製薬）に入社して12年目。それまで、社内の創薬研究で成果をあげた人だけの特権だった研究留学制度が見直されて公募制になった。留学は順応性の高い若いうちに経験するのが望ましい。34歳になった森さんにとっては、ぎりぎりのタイミングに思えた。加えて、担当していた研究が行き詰まり、方針を見直さざるを得ない状況にもあった。「この機会は絶対に逃すまい」という背水の陣の思いで応募。選考面接では、研究計画のプレゼンテーションに加え、「女性が研究留学した例はない。後輩のためにも実績をつくりたい」と力説した。海外で単身で生活するという未知の世界に対する不安が頭をもたげたのは、米スタンフォード大学へ派遣が決まってからだった……

人生を変えた大学での 恩師との出会い

森さんは、元々、こんな風にタフにキャリアを切り拓いていくタイプの女性ではなかった。都立西高からお茶大理学部化学科に進み、大学4年生のとき、今野美智子先生の研究室に配属されるまでは、化学を極めて研究職に就きたいといった堅い意志も持たない、ごく平凡な学生だった。変わったのは、恩師今野先生との出会いだった。研究室に入って、いきなり、ブタ血液からのたんぱく質精製実験を一人で任された。まだ実験法が確立されていなかったため、古い論文をこつこつ解読しながら血漿を遠心分離し、大きなカラムに流して目的の蛋白質を分離する、といった単純作業を延々と繰り返す日々。「夜遅くなったときは、今野先生が差し入れてくれた惣菜パンをほおぼりながら、一緒に研究について雑談したものです」と、森さんはその時代を懐かしむ。当時米国から帰国したばかりでエネルギーに溢れる今野先生は、女



Mori Akiko
森 哲子

性が自立することの大切さを説いた。「そこから私の人生が変わった」と森さんは言う。そして、東大生物化学修士課程修了後、化学メーカーで、かつバイオを扱っている企業での研究職を選ぶ。三菱化成に入ったのは、女性を積極的に登用していることを知ったからだった。

キャリアの転機

2004年、2年にわたる米国留学から帰国した森さんは、留学先での研究テーマを活かし、アルツハイマー病治療薬開発チームのリーダーに抜擢される。世界各国から集まった多種多様な研究者たちとの切磋琢磨で磨かれたコミュニケーション力は、当時担当した大手仏企業との共同研究に役立ただけでなく、チームを引っ張っていくうえでの大きな財産になった。

今年4月、森さんに「想定外」の転機が訪れた。入社以来ずっと研究所で新薬の開発をめざして研究に専念する日々から、本社「製品戦略部」への異動だ。新たなミッションは、どのような疾患に対してどのような効果のある薬を開発すれば患者さんに貢献できるのかという視点にたって、会社の医薬品全体の構成を考え、その実現のために部門をまたいで調整する仕事だ。会社組織の根幹である「ビジネス」により近いところで新薬開発に関わる部署で、しかも女性キャリアは1名のみ。「自分が関与した薬が実際に患者さんの役に立つことを実感できる一握りの幸運な研究者になる」のが夢だった森さん

田辺三菱製薬(株) 製品戦略部主席

1989年
お茶の水女子大学
理学部化学科卒業

1991年
東京大学大学院理学系研究科
生物化学専攻修士課程終了

1991年
三菱化成(株)(現:田辺三菱製薬(株))入社、研究部門配属

1999年
東京大学にて農学博士号授与

2001年~04年
スタンフォード大学へ
研究留学派遣

2011年
4月から現職

にとって、夢に一步近づくための大きなチャレンジが始まった。その原動力は、大学時代、今野研で学んだゼロから何かを立ち上げる苦勞と自信、研究に対する真摯な心だ。

入社以来これまで様々なレベルの転機が訪れた。自分の専門外の研究領域へのトップダウン異動命令で上司に抗議したこともあった。今、思えば、固執せず転機を活かしたことで、新しい自分の世界がひろがった。けれども転機は漫然と待っていても来ない。「幸運の女神は準備のできた者に微笑みかける」。フランスの化学者パスツールの残した言葉は森さんの座右の銘である。

文責：坪田秀子(学長特命補佐)

わたしのオフタイム

お茶大を卒業して間もない頃、恩師の今野先生と山小屋1泊の行程で白馬に登った。その時の朝のコーヒーのおいしかったこと！それ以来、気が向くと友人を誘って丹沢にハイキングに出かけている。夢は槍ヶ岳に登ること。普段から体力維持を心がけていつか実現させるつもりだ。

附属学校園からのお知らせ

附属小学校便り

本校の教育目標は『自主協同』

このたびは初めての本誌掲載なので、附属小学校の紹介から始めます。幼稚園と小学校の敷地境近くに建っている『自主協同』の碑は、本校の教育目標を表しています。具体的なめあては、「自分で考えて正しく判断し、進んで行動する子」「自然と人間を大切にし、情操の豊かな子」「健康で気力体力が充実し、意志の強い子」を育成することです。この『自主協同』をめざして734名の児童（平成23年5月現在）、31名の教員ほか講師や職員23名、知力・体力を合わせて学習や教育活動に取り組んでいます。

授業とカリキュラムの実践研究校

1977年に文部省（当時）から「低学年における合科的総合的方法に関する研究」の委嘱を受けて以来（これは生活科の先導的な研究となった）、30年以上にわたり、研究開発学校としてほぼ継続的に8つの新しい課題（難題）に取り組んできました。

近年では、附属の立地を生かし幼・

小・中連携で「協働して学びを生み出す」（2005～2007）、「小学校における『公共性』を育むシティズンシップ教育」（2008～2010）を探究し、新しい授業とカリキュラムを教員みんなで話しあいながら創ってきました。

本校の教科名は、研究テーマ「関わりあって学ぶ力を育成する」（2001～2003）の頃から「ことば」「市民」「自然」「アート」「生活文化」「からだ」などのように呼びならわし、子どもたちの生活や関心に沿って互恵的な意味ある学びを展開するように、教員それぞれ日々の授業の工夫を続けています。

担任の仕組み

1953年（昭和28年度）以来、「協力学年担任方式」を実施してきました。これは普通の学級担任方式とは違って、同学年3～4学級を3～5名の教科分野の異なる教員が協力して学年学級の運営並びに学習指導を行うやり方です。

子どもにとっては毎年、多様な価値観や専門性にふれることができ、教員にとっても他者と協働すること、チームで問題解決することができる優れたシステムです。



運動会のダンス伝統の“のぎく”

研修・研究の場

大学の附属研究学校として年間を通し、他校の先生方が参観に見えたり、国内外の大学の研究・研修の場となったりします。教職をめざす教育実習生やインターンシップの学生の受け入れはもとより、本校教員が他校の研究会へ講師として派遣されることもあります。また、全国から約2000名の教育研究者が集まる例年2月の「教育実際指導研究会」は今年で第75回目となります。

なお、かがみ会（在校生保護者と教職員）や茗鏡会（卒業生の会）、教育後援会など学校運営をサポートする組織も堅実で、例えば3年前からは「みんなでつくる」を合い言葉に



新入生を迎える会“入場の花のアーチ”



アメリカからの参観“給食交流”

附属学校園での出来事 (2011年4月～5月)

【いずみナーサリー】

4月

- ・避難訓練 (図上訓練)
- ・保護者会

5月

- ・ボランティア学生による「スライムで遊ぼう」
- ・院生による「食育」パネルシアター
- ・保育参観
- ・避難訓練
- ・ナーサリー室内開放

【附属幼稚園】

4月

- ・始業式
- ・入園式
- ・防災訓練
- ・保護者全体会
- ・5歳児園外保育
- ・PTA 総会
- ・4歳児親子で遊ぶ日
- ・誕生会
- ・五月人形学内向け公開
- ・子どもの日の集い

5月

- ・健康診断
- ・親子遠足
- ・誕生会
- ・防災訓練

【附属小学校】

4月

- ・第1学期始業式
- ・入学式
- ・委員会活動 (5・6年) 開始
- ・新入生を迎える会
- ・授業研究会
- ・避難訓練
- ・授業参観
- ・保護者総会
- ・かがみ会総会
- ・教育後援会総会

5月

- ・委員会活動 (5・6年)
- ・郊外園活動 (4・5年さつまいも植え)
- ・学校参観
南ユタ大学教授<栄養学>と学生
- ・教育実習開始
- ・授業研究会
- ・運動会

【附属中学校】

4月

- ・入学式
- ・始業式
- ・3年学力テスト
- ・生徒会委員等任命式
- ・PTA 委員全体会
- ・生徒歓迎会
- ・2年郊外学習
- ・避難訓練

5月

- ・生徒総会
- ・鏡水会総会
- ・PTA 総会
- ・2年郊外園

【附属高等学校】

4月

- ・入学式
- ・始業式
- ・対面式
- ・新入生オリエンテーション
- ・3年修学旅行
- ・自治会選挙、歓迎会
- ・PTA総会
- ・教育後援会総会
- ・各学年保護者会
- ・春季健康診断

5月

- ・3年学力テスト
- ・3年校外学習
- ・1年学年合宿
- ・2年遠足
- ・1年農場 (さつまいも植え)
- ・体育祭



(4・5・6年女児)



補植用の芝の苗づくり

保護者・児童・教員ともども校庭の芝生化に取り組んでいます。

開校133周年の「古い確かさ」と「先進の新しさ」は本校の伝統カラーと言えるでしょう。

キャンパス点描

卒業生の溝口紀子さん、「猿橋賞」を受賞

本学理学部数学科卒業生の溝口紀子さん(東京学芸大学教育学部自然科学系准教授)が「第31回猿橋賞」を受賞され、授賞式が2011年5月28日におこなわれました。

受賞研究題目:爆発現象の漸近解析

溝口紀子さんのプロフィール

溝口紀子さんは、1985(昭和60)年に本学理学部数学科を卒業後、理学研究科に進学し、理学修士の学位を取得されました。本学在籍中は渡辺ヒサ子名誉教授の研究室に属しておられ、関数論の関数解析的な研究をされました。その後、東京工業大学大学院に進み、1990年「不動点定理とその応用」により理学博士の学位を取得し、日本学術振興会特別研究員を経て、1993年東京学芸大学講師、1995年東京学芸大学助教授、2007年東京学芸大学准教授になりました。

過去の本学受賞者

本学では、すでに以下の4名の理学部卒業生が猿橋賞を受賞しています。

山田晴河さん (第2回、物理学、1955年化学科卒)

石田瑞穂さん (第9回、地球科学、1966年物理学科卒)



授賞式後に記念講演をする溝口さん

黒田玲子さん (第13回、化学、1970年化学科卒)

森郁恵さん (第26回、生物学、1980年生物学科卒)

猿橋賞

猿橋賞は、1980年創立の「女性科学者に明るい未来をの会」が、自然科学の分野で顕著な研究業績をあげた女性科学者(50歳未満)における賞で、猿橋勝子博士によって創設されました。多くの自然科学分野の学会からそれぞれ推薦された候補者のなかから、毎年1名に与えられる名誉な賞です。

本学独自奨学金「お茶の水女子大学予約型奨学金(みがかずば奨学金)」授与式がおこなわれました



2011年4月28日に、「お茶の水女子大学予約型奨学金(みがかずば奨学金)」の授与式を開催しました。

この奨学金は、お茶の水女子大学へ入学を希望する受験生に対して、入学後の生活の目処をたててもらうことを目的として、平成23年度に新たに設立されたものです。

対象者は、①日本の高等学校又は中等教育学校を卒業見込みの者(現役生対象)②当該年度の4月に本学学部

1年生に入学する予定の者で、本学に強く入学を志望する者③成績・人物とも優秀(調査書の学習成績概評がA以上の者)で、大学進学において経済的支援が必要と認められる者です。奨学金は、学部1・2年次に各30万円を支給します。

平成23年度は、入試前に出願し内定を得た者の中から、本学に入学を果たした19名の学部1年生が奨学金受賞者として採用されました。

式典では、学部長等の関係教員臨席のもと、羽入学長から受賞者一人一人に賞状が授与されました。また受賞者の中から各学部の代表が、今後の学修や学生生活に関する意気込みについて挨拶を述べました。

受賞学生の挨拶については大学ホームページをご覧ください。

http://www.ocha.ac.jp/topics/h230510_3.html

本学独自奨学金「お茶の水女子大学学部生成績優秀者奨学金」授与式がおこなわれました



2011年5月24日に、「お茶の水女子大学学部生成績優秀者奨学金」の授与式を開催しました。

この奨学金は、学部3年に在学する者のうち、1・2年次の成績・人物が特に優秀と認められた者について、これま

での努力を評価し、今後一層の勉学を奨励することを目的として、平成23年度に新たに設立されました。対象者は学部1・2年次から引き続き在学する本学学部3年生(中途に休学期間がない者に限る)で、奨学金給付額は、20万円です。

平成23年度は、厳正なる審査の結果、25名の学生が奨学金受賞者となりました。式典では、関係教職員臨席のもと、羽入学長が受賞者一人一人に賞状を授与し、励ましの言葉を述べられました。

新学生寮「お茶大 SCC」 開寮式を開催しました

2011年4月16日に、3月に竣工した新学生寮「お茶大 SCC」の開寮式を挙行了しました。式典には来賓として新寮に隣接する跡見学園女子大学の山田徹雄学長をお招きし、本学経営協議会委員や理事、監事及び教職員も出席しました。また、本学が保有する三つの学生寮の代表者も招待されました。

式典の冒頭で、羽入佐和子学長より、「お茶大 SCC」(Students Community Commons) の理念について説明が行われました。本学附属図書館の先進的取組である Learning Commons は「共に学び、共に成長する」を理念とするが、お茶大 SCC では「共に住まう」を加え、個を尊重しつつも他者との関係の中で学生一人一人が成長するというコンセプトを持つことが紹介されました。

また、山田跡見学園女子大学学長は「お茶大 SCC が先進的取組となるよう期待しております」との祝辞を述べられました。その後、耳塚教育機構長及び桂寮生アドバ



イザーよりお茶大 SCC の理念と今後の取組についての説明がありました。

式典後は、寮生たちが生活する各ハウスのリビングに式典出席者を迎え、懇談を行いました。懇談会終了後には、寮生に向けた第一回学修プログラムとして、羽入学長による講演が行われました。

「お茶大グッズ」新アイテムの販売を開始しました

昨年10月の「お茶大グッズ」第1弾に続き、新アイテムを3月23日よりお茶大生協購買部にて販売を開始しました。新アイテムは、マグカップ、ノート、パスケース、クリスタルペーパーウエイト、キーホルダー、3色ボールペンの6種類です。

新アイテムのうち、ノート4冊セットとクリスタルペーパーウエイトは、売り上げの一部が、NGO 団体「ルーム・トゥ・リード (Room to Read)」を通じて途上国の少女の教育支援金となります。

- マグカップ ¥950
- パスケース ¥800
- ノート 1冊¥270 / 4冊セット¥1,020
- クリスタルペーパーウエイト ¥1,800
- キーホルダー ¥800
- 3色ボールペン ¥250



キャンパス点描



平成23年度入学式

お茶の水女子大学学报 第229号

▽発行日：2011年7月6日

▽発行：国立大学法人お茶の水女子大学

東京都文京区大塚 2-1-1 (〒112-8610)

ご意見・ご感想はこちらまで

学術・情報機構広報チーム

電話 03-5978-5105

FAX 03-5978-5545

E-mail : info@cc.ocha.ac.jp

URL : http://www.ocha.ac.jp/

本誌、お茶の水女子大学学报「GAZETTE」は、
本学ホームページにも掲載していますので、どうぞご覧ください。